

佳作

信用と友情

茨城県 かすみがうら市立霞ヶ浦中学校三年 道念 偲帆

私には自慢できることがある。それは、「友人」だ。私には感謝したい友人達がいる。

中学一年の冬、私は大きな事件に巻き込まれた。精神的にぼろぼろになってしまったし、友達にそのことを隠したまま、二年生に進級してしまった。新学期になったが正直毎日が恐怖だった。またあの時みたいにならないか、友達に変な誤解をされてしまわないか。毎日毎日怯えて、辛い思いを耐えながら学校に通っていた。

体育祭の練習が始まった頃、クラスで席替えがあった。私が変われたのはそれがきっかけなのかもしれない。

ある総合の時間、隣の席の子の友達がなんとなく集まってきて私の友達もなんとなく集まっていた。その時、私の友人が家の事を話していた。正直私は

そんな大事なことをここで話すことなのか、疑問に思った。だって、いつ友達じゃなくなるか分からない人に話して、もしその事が他人の耳に入るような事があったら、話した事を後悔するから。私は友人に尋ねた。すると友人は、

「だって私みんなのこと信用してるから。あなたは信用しようと思えないの？」

そう言われた時、少し考えた。信用とはなにか。考えた末、信用とは人と人との繋がりの証で、友情の証だと思った。

そして今までの事を思い返した。席替えをしてから休んだ時、必ず次の日に、「大丈夫？」「無理はするなよ」そう声をかけてくれた友人達がいた。この人達になら今までのこと、休んでいた理由を話してもいいんじゃないかと思ってしまった。今までの自分ならありえないことだ。でも、意を決して話した。すると自然と肩の荷が降りたように気持ちが楽になって、涙が溢れた。その時の友人達は、一緒になっ

て悲しんでくれて、沢山の励ましの言葉をかけてくれた。ただただ嬉しかった。信じることで自分が楽になるなんて、今まで考えたことがなかった。ただ、私は事件が終わった後が

問題だった。何度も身を捨てようと思った。何度も居なくなってしまうかと思った。でも、いつもそのことを考える度に友人達との思い出が思い浮かぶ。その度に涙が溢れる。体育祭、合唱祭、学年レク、あたりまえな毎日。それを思い出しては立ち直り、それを繰り返し返していくうちに、今まで悩んでいたことが馬鹿らしくなってくる。そう思えたのも友人達のおかげだ。

今も、友人達とクラスはバラバラになったが、たまに集まって、ふざけ合う。きっと私が思い出を思い返した時、一番に友人達との毎日を思い出さるう。

人が生きていけるのは信じているからだと信じている。信じていることで沢山の感動を生み出すことができる。私は毎日全ての出来事に感謝して、強く生きていく。